漢文教材における戦国七雄への視点
―趙国の場合―

樋口　敦士

キーワード：趙氏、春秋戦国、邯鄲、戦国七雄、漢文教材

【要　旨】高等学校の漢文教材の中で、戦国時代については、「史伝」よりもむしろ「故事成語」を取り扱うものとして採録されている場合が少なくない。ただ、戦国期の記述が最も精彩を放っているといった見解もしばしばなされる。確かに覇を競い合う中で優秀な人材を各国が求めていたはずであるが、秦が単独で強大であるといったイメージが常につきまとう。裏返せば「戦国七雄」と総称されながらも、他の六国はあたかも脇役としての立場に徹しているといった見方も根強いことを意味する。教科担当者はこうした状況をもう一度洗い出しながら、教材の見直しが必要となろう。特に、趙氏の歴代君主の事績には注目すべき点が多々ある。

主君であった晋の文公とともに各国を放浪した趙衰、「弑君」の汚名を甘んじて受けた趙盾、一族滅亡の危機に瀕しながらかろうじて血脈を保った趙武、名君の誉れ高い趙簡子や趙襄子の治世、「胡服騎射」政策を導入して軍事大国化を果たした武霊王、廉頗と藺相如の活躍をもたらした恵文王、戦国四君の一人として多くの食客を抱えた平原君など、趙氏一族には話題が事欠かない。

趙氏の黄金期も秦の台頭により翻弄されることになる。結果的には抵抗空しく、次第に秦の圧迫を受けながら滅亡を迎える。しかし、この地には秦の公子子楚が人質になっていたため、新時代の立役者である始皇帝が生まれていることも忘れてはならない。また、「性悪説」を唱えた荀子も趙の出身であり、その弟子の韓非子や李斯は秦の政治思想に大きく関わった。以上の点からも趙氏が常に話題性を孕んで各国から注目を浴び続けた存在であったことがわかる。こうした背景により『荘子』の「邯鄲の歩み」、さらには唐代伝奇小説『枕中記』などの舞台として用いられ、後世から「邯鄲」の都は夢や憧憬の場所として記憶されてきた。本稿では「故事成語」の点から断片的に扱われてきた戦国時代を、趙氏の事跡に焦点を当てながら「史伝」的な観点から体系的に捉え直すことを狙って提言したものである。

一　はじめに

高等学校の漢文教材を大別すると思想、詩文、史伝の三つに分類されるという。このうち、「史伝」について田部井文雄は次のように述べている。

中国史のスケールの壮大さ、重い歴史的事実の存在感、ド

ラマチックに展開する人間模様などを、如実に伝えている史伝の教材のほうが、或いは、思想や文学のそれよりも、現代の高校生を容易に魅惑するものを持っているのかも知れない[1]。

「史伝」と言えば、『史記』の漢楚興亡の故事や『三国志』の三国鼎立の故事が漢文教材のみならず、一般的に広く人口に膾炙している現状がある。一方で、それに先立つ戦国時代については、「史伝」よりもむしろ「故事成語」を取り扱うものとして教材に採録されている場合が少なくないのではなかろうか。ただ、『史記』については「戦国期の記述がもっとも精彩を放っている[2]」といった見解もしばしばなされる。覇を競い合う中で優秀な人材を各国が求めたため、自然と人々の言論が活発になり、孟子や荀子をはじめとする諸子百家による「百花斉放」時代を迎えた土壌があったことにも注意せねばなるまい。また、国と国との駆け引きの中で生まれた「隗より始めよ」、「虎の威を借る狐」、「漁父の利」などの「故事成語」が生まれたことも特色である。こうした視点に立てば、確かに魅力的な時代であったとも言えよう。思想と故事の両面では確かに充実した時代という印象は受けるものの、一つ一つの故事の通史的な視点についてはこれまで教材としての情報は乏しかったものと思われる。

高等学校の漢文教材において、戦国時代についてはやはり個々の「故事成語」に焦点が当てられた単元が多く、時代背景が捉えにくい体裁になっている。教材中の春秋戦国期の歴史的な事例を並べると、春秋時代における晏子の言動、ほぼ同時期に起きた呉越の興亡における《臥薪嘗胆》の故事を扱うといつの間にか戦国時代が出現し、《鶏口牛後》や《完璧帰趙》などの各国間の駆け引き、《刺客荊軻》による始皇帝暗殺未遂を経て、秦が天下統一を果たすものの、その秦も始皇帝崩御の後すぐに瓦解して《項羽と劉邦（漢楚の興亡）》に至るという一連の流れしか持ち合わせていないのが現状であろう。このように眺めてみると戦国時代は群雄割拠の中で、秦が常に独り勝ちしたかのような史観で捉えられてきた。「戦国七雄」と総称されながらも、秦に怯える他の六国は脇役に過ぎないという偏ったイメージがつきまとって離れない。教科担当者はこうした状況をもう一度洗い出しながら、戦国期の各国が置かれた状況について整理して、教科指導に反映させていく視点が求められる。これまで断片的に扱われてきた感のある戦国時代「史伝」教材を体系的に捉えて見直すことにより、教材開発への提言は今後もなされることになろう。「戦国七雄」と一口に言っても国々が置かれた状況は異なり、直面している問題は様々である。本稿では「趙」国の歴史を取りあげてこの一族の歴史的故事に焦点を当てて考察したものである。これは七雄の中でも特に話題性が豊富で、教材として資するところが大きいものがあると判断したためである。（※単元教材としての名称には《　》を用いた）

二　趙国について

趙は現在の河北省と山西省を中心とした強大な勢力圏であ

り、当時は東に燕、斉、南に韓、魏と境を接していた。もともとは晋に仕えた六卿（范氏・智氏・中行氏・趙氏・韓氏・魏氏）のうちの一つに過ぎなかったが、六卿のうち三卿を潰滅させた趙氏・韓氏・魏氏は、その後晋からの独立を果たして発展するに至る。教科書では恵文王治世下の廉頗と藺相如の故事《完璧帰趙》や《刎頸之交》が定番教材として採録されており、強大な秦国の恐喝に対しても毅然とした態度で接した人物の美談が紹介されている。また、《漁父之利》の故事成語もしばしば採録されているが、これなども遊説家蘇代が趙の恵文王に対して「鷸蚌」にたとえながら燕攻撃を戒める寓話として有名である。そこにもやはり背後にあった秦の存在への警戒感が込められている。このように見ていくと、趙もまた秦に怯えた一国に過ぎなかった印象を与えかねない。一方で当然のことかもしれないが、秦の方もまた列国を恐れていたという話もある。荀子が秦の宰相になる弟子の李斯に向かって「秦は四世に勝あるも、諰諰然（しぜん）として常に天下の一合して己を軋（あつ）せんことを恐る。此れ所謂末世の兵にして未だ本統に非ざるものなり」（『荀子』「議兵篇」）と指摘して、秦の強兵もまた不安に駆られていたとする現状を暴き出していることにも注意したい。いくつかの観点から、趙氏の歴史を踏まえながら捉え直していかねばならない。

趙氏を知る上では『春秋左氏伝』、『史記』「趙世家」及び「列伝」、『戦国策』「趙策」、『十八史略』「春秋戦国」などの史料などのほか、『説苑』、『新序』、『国語』、『呂氏春秋』などにも逸話が見える(3)。特に『史記』「世家」と『戦国策』には趙氏の事項がまとまった形で記載されており、歴代の君主の事跡を通史的に俯瞰することもできる。

遠祖である趙衰は春秋五覇の一人晋の文公に従って各地を放浪し、帰国後は文公が覇者となるに従い、厚く遇せられたことから趙氏の興隆は始まる。趙衰の子趙盾は、史官により霊公（文公の孫）弑逆者の汚名を着せられたが、彼がこの筆誅を甘受したことは後世まで話題となった。

前四五三年、趙襄子のとき六卿の最有力者たる智伯が台頭し、韓氏、魏氏に誘いかけて趙氏を討伐しようと水攻めをしたが、趙襄子側の説得により韓、魏の二君を味方に引き入れることに成功し、智伯を滅亡へと追いやった（晋陽の戦い）。前四〇三年には周王より韓・魏とともに叙爵され、「三晋」として独立を果たし、これ以降晋との主従関係がなくなる（戦国時代の幕開け）。敬侯の時代には「邯鄲」に都を移した。粛侯の時代には蘇秦が強秦への対抗策として六国合従を呼びかけている。その次の武霊王の時代、前三〇七年には「胡服騎射」政策を導入して軍事大国化を果たす。恵文王の時代には藺相如の活躍があり、「虎狼」と評された秦からの脅威を感じつつも、古参の廉頗や趙奢に加えて名将楽毅までもが燕より亡命を果たしていたため、優れた人材が結集した状況であった。戦国末期には呂不韋が邯鄲に人質になっていた秦の公子子楚（始皇帝の父）を見つけ出し、「奇貨居くべし」の精神でパトロンとして彼を王位に就けることにより、天下を一統する始皇帝の登場を見る。

こうした一連の流れを踏まえてみても春秋戦国期に趙氏が歴史の表舞台に登場した場面も少なくない。にもかかわらず、漢

文教材には断片的に紹介されているに過ぎず、前後関係をしっかりと把握するのは難しい。ここでは趙氏の故事を整理した上で浮かび上がる課題について検討したい。

以下に春秋戦国期における趙氏と関連のある故事を採録した現行の教材を時代順に掲げ、該当する事項の当主とその在位期間を記した。（教科書を「国総」、「古典A」、「古典B」に区分した上で、出版社名を略称。数字は各社の採録教科書の数を表すが、同一名称のものは合冊・分冊にかかわらず①とみなした）

【趙襄子】前四五七～前四二五年

○《唇亡歯寒》〔『戦国策』「趙策」〕（「古典B」…第一①）

【粛侯】前三四九～前三二六年

○《孫臏（以孫子為師）》〔『史記』「孫子呉起列伝」〕（「古典B」…第一②、筑摩①、数研①）

○《鶏口牛後》〔『十八史略』「春秋戦国」〕（「国総」…桐原②、明治②、三省②、東書①、数研①）

○《張儀（辱められて怒る）》〔『史記』「張儀列伝」〕（「古典B」…第一①）

【恵文王】前二九八～前二六六年

○《完璧帰趙》〔『史記』「廉頗藺相如列伝」〕（「古典B」…桐原②、三省②、教出①）

○《完璧（而帰）》〔『十八史略』「春秋戦国」〕（「国総」…第一①、筑摩①、「古典B」…東書①、明治①）

○《澠池之会》〔『史記』「廉頗藺相如列伝」〕（「古典B」…桐原②、三省②、教出①、東書①、明治①）

○《刎頸之交》〔『史記』「廉頗藺相如列伝」〕（「古典A」…筑摩①、「古典B」…桐原②、三省②、教出①、東書①、数研①、明治①）

○《漁父（之）利》〔『戦国策』「趙策」〕（「国総」…三省②、第一①、数研①、桐原①、東書①、「古典A」…右文①、「古典B」…大修①、右文①）

【孝成王以降】前二六五～前二二八年

○《信陵君（公子人と為り仁にして士に下る）》〔『史記』「魏公子列伝」〕（「古典B」…第一②）

○《趙太后》〔『戦国策』「趙策」〕（「古典B」…第一①）

○《呂不韋（奇貨居くべし、子楚を適嗣と為す、太子の政立ちて王と為る）》〔『史記』「呂不韋列伝」〕（「古典B」…大修①）

右記の通り、恵文王時代の《漁父（之）利》や《完璧帰趙》の故事が特に多く採録されていることがわかる。秦に脅威を感じつつも、最盛期を迎えていたことも確かに現実としてあった。孝成王時代に当たる前二六〇年の長平の敗戦を経て衰退の一途をたどることになる。教材中で趙国の現状を端的に言い表すものは、藺相如が恵王に語った「秦は彊く、趙は弱し」（『史記』「廉頗藺相如列伝」）の一言である。この簡潔な短評は学習者の脳裏に両国の立場を鮮明に刻印することになるだろう。ただ、この見解を鵜呑みにすることも難しく、二国間の「国力の差」については検討を要する。もし、この強弱が圧倒的なものだとすれば、「合従連衡」が叫ばれた時代から、百年にもわたって統一が成し遂げられなかったことにも説明がつかない。ま

た、常に秦を恐れ続けなければならない程度の小国であれば、武霊王や恵文王治世下のように秦に対して挑発的な態度をとり続けていた時代があったことにも疑問が残る。楊寛は、むしろ趙の国土の方が秦よりも広大であったと指摘している（『戦國史１９９７増訂版』第七章　二七九頁）。

教材として扱う場合、生徒への予備知識を与えた方が展開を説明しやすくなるには違いない。強大な秦と卑小な六国の存在の対立構図は、生徒に当時の時代状況を整理して伝えることを可能にするが、指導者としてはこの点を正確に把握しておかねば、その説明に破綻をきたすことになりかねない。三国時代の鼎立状態ですら統一が至難の業であったのだから、そうやすやすと秦が六国を束ねてしまうことは容易ではなかったことは想像がつくはずである。それでは、趙国が単元教材としていかに受容されてきたのか課題も含めて考察することにしたい。

三　現行漢文教材に見える趙国史の課題

現行の漢文教材の中では「趙国」を話題にした故事がいくつか散見される。特に、藺相如の活躍めざましい《完璧帰趙》の故事は現在定番教材として取り扱われており、強者にも敢然と立ち向かう不屈の精神や廉頗との固い友情などは単元としては最適なものだろう。司馬遷も称賛していることにより、『史記』中に燦然と光を放っているのも確かだが、先入観のみでこの故事を捉えてしまっているきらいはないだろうか。ここでは、趙氏にまつわる三つの現行教材を取りあげて、いくつかの観点から取り扱う上での留意点について確認しておきたい。

(1)趙襄子と《唇亡歯寒》故事

『戦国策』に記載される《唇亡歯寒》については菊池隆雄がこれを七つの場面構成で演劇的に紹介するといった実践を報告している。ここでは「史伝」が事実そのものを記載していない点、演劇的な提示をすることで時間や空間を自由に行き来できる点に気づかせる狙いがあるという(4)。

この単元を採録している第一学習社は、「春秋時代の大国の分裂に際して、いずれ劣らぬ優れた知略を持つ二人の謀臣が、それぞれが仕える主君の明不明によって運命を異にする話であり」（『古典Ｂ』「古代の史話」）と解説しているが、ここでいう名君とは趙の当主趙襄子のことであり、対する暗君とは智伯を指していることは明白である。

晋の六卿の中で一番勢力を広げる智伯は目障りな趙襄子を破るために、韓、魏と同盟を呼びかけて趙氏の領地を三者で分け合おうとした。趙襄子は臣下の張孟談の勧めにより晋陽に籠城して智伯に抵抗するが、水攻めによる長期戦でもあったため、城内の食糧も底を尽く。そこで張孟談は内密に寝返りを画策するため、韓、魏二君のもとへと足を運んだ。

張孟談於レ是ニ陰ニ見テ二韓・魏之君一ニ曰ク「臣聞ク、『唇亡ビバ則チ歯寒シト。』今智伯、帥キテ二二国之君ヲ一、伐チレ趙ヲ、趙将ニレ亡ビント矣。亡ビバ則チ二君為ラント二之ガ次ト一矣。」

（『戦国策』「趙策一」）

張孟談はここで巧みに「唇亡びて歯寒し」の語を持ち出しているが、これは「互いに助け合うべき関係において、一方が滅びたらもう片方も危険である」ことを意味するものである。すなわち、我が趙滅亡後は韓、魏の番であることを示唆し、それならばいっそ三氏が協力して智伯を打倒すべきではないかと同盟を持ちかけている。一方、智伯に仕える智過は二君の変心を既に見抜き、主君に魏、韓の二君を討つか、さもなくば、その謀臣を厚遇して手なづけるか、どちらかの策を選ぶようにと進言する。智伯はまともにこれを取り合おうとはしなかったため、結果的に智伯は三氏同盟によって滅ぼされ、智過は姓名を変えて姿を隠すという顛末であった。韓、魏二君の心を動かした「唇亡びて歯寒し」の語は実感を持って聴く者に迫ったことだろうが、実はこれが初出ではない。趙襄子の時代を遡ること更に二百年前の春秋時代、晋の献公が虢（かく）を攻めるために虞公から道を借り受けようとした件に対して宮之奇が異見する場面がそれに当たる。

> 晋侯復タ仮リ二道ヲ於虞ニ一以テ伐ッレ虢ヲ。宮之奇諫メテ曰ク「虢ハ、虞之表也。虢亡ベバ、虞必ズ従ハンレ之ニ。晋ハ不レ可カラレ啓ク。冠ハ不レ可カラレ翫ブ。一タビスルモ之レ謂フレ甚シト。其レ可ケンレ再ビスル乎。諺ニ所謂、『輔車相依リ、唇亡ブレバ歯寒シト』者、其レ虞・虢之レ謂フ也ト。」（『春秋左氏伝』僖公五（前六五五）年）

晋の野心を見抜いた宮之奇はその申し出を断るように進言したが、虞公には聞き入れられなかった。宮之奇の予想通り虢に続き、虞も滅ぼされる。出処が明確で先例を有する言葉であるからこそ、韓、魏二君も張孟談の説得に耳を貸したのかもしれぬが、これを見出しに採録するとこの発言が当該故事の典拠であるとの誤解を招く恐れもあり、配慮を要するところだろう。

次に、「智伯」と「趙襄子」の人柄を見てみたい。韓、魏二君は智伯を指して「廱中にして親しみ少なし」（『戦国策』「趙策」）と評していることから、他者からは人間味の薄い人物として見なされていたことが読み取れる。智過の進言を退けて滅亡を招いた智伯は確かに暗君には違いない。さらに、「知（智）伯益（ますます）驕り、地を韓・魏に請ふ」（『史記』「趙世家」）といった記述からは、彼らに土地の割譲を求めるなどの尊大な態度が強調されている。あまつさえ割譲要求を拒絶した趙氏に対しては、「知伯酔ひ、酒を以て灌ぎて毋恤（ぶじゅつ）（趙襄子）を撃つ」（「趙世家」）と趙襄子を酒席で叩くといった智伯の粗暴な一面まで描かれている。

一方で、趙襄子の人柄はいかがだろうか。韓、魏二君の取り込みに成功した張孟談からの「今暮撃たずんば、必ず之に後れん」（『戦国策』）という進言に対して、一言「諾」と即答した趙襄子は確かに名君と呼ぶに値しよう。その父趙簡子（趙鞅）も人心掌握に長けており、その優れた資質を示す逸話が数多く残されている[5]。その趙簡子が後嗣を選ぶに際して、「尽く諸子を召して与（とも）に語る。毋恤最も賢なり」（「趙世家」）と判断していることからも、庶出であった趙襄子の優れた資質は疑いようもない。智伯と趙襄子の両者の賢愚は対照的であるようにも見える。

『戦国策』には智伯滅亡に続き、刺客予譲の物語が始まる

（『史記』「刺客列伝」にも同様の記述がある）。「刺客」といえば、戦国末期に秦の始皇帝の暗殺を試みた荊軻が思い浮かぶ。刺客となり自己を犠牲にしてまで大役を果たそうとしたものの、無念の気持ちで散った人物の姿には胸を打つものがある。荊軻より遥か昔の春秋時代、智伯のために刺客と化した予譲は、当初范氏、中行氏に仕えたものの、どちらからも厚く遇されることはなかった。智伯のもとで国士の扱いを受けて恩義を感じた予譲は、智伯謀殺後に「士は己を知る者の為に死す」という言葉を放って復讐を決意する。容姿を爛れさせて炭を飲んで声を変えてまで、仇である趙襄子を付け狙うが、結局は討ち果たすことができず、趙襄子から譲り受けた衣服を剣で三度突いて、「これであの世の智伯に顔向けできる」と言い残して果てる。予譲の側から見れば、仇である趙襄子はどのような存在だったのだろうか。智伯に対する趙襄子の憎しみは「趙襄子最も智伯を怨みて、其の頭を将（もっ）て飲器と為す」（『戦国策』「趙策」）までに達していたという。名君にふさわしく予譲の立場に理解を示してはいるものの、亡き主君の領地を貪り、その髑髏を杯にして酒を飲んでいた趙襄子の姿は、予譲の目にはさぞかし傲岸不遜な態度に映ったことだろう。趙襄子に対する横暴な態度と、予譲を厚く遇する徳者としての一面という智伯の表裏を示す二面性についての理解はいくつかの故事を散見しなければ到達しないことになる。堯舜、桀紂をはじめとする中国の歴史上の人物はとかく善悪どちらかのイメージが色濃く付されがちであるが、いくつかの視点で書き分けられている人物については、一方的な見方にとらわれてしまうと、史観の中立性を損なう恐れがある。

　ちなみに、趙襄子には「人の利に乗じない」徳性が、彼を強国の君主の地位につけた理由であったとする記述が『新序』「雑事」に見える。彼には「滅び」を問いにした逸話も多く、五日もの間宴会に耽っていた自身を顧みて家臣に殷の紂王と比較させた逸話（「刺奢」）、春秋呉の滅亡理由について家臣と問答する逸話（「雑事」）なども『新序』に見える。常に予見性のイメージを備えた人物として捉えられていたようである。その臣下である張孟談が「唇亡歯寒」の寓言を持ち出して説得した脳裏には、二百年前の虢、虞の先例が当然あったはずである。

　なお、この趙襄子はちょうど孔子の生存した時代に当たり、趙襄子の父趙簡子が子貢に孔子の人柄を聞いて大いに感服した話（『説苑』「善説」）、孔子が『春秋』に「趙簡子が晋君に背いた」と記述した話（『史記』「趙世家」）、逆に天下を窺うためには障害となる孔子を招き寄せて殺害しようと企てた話（『説苑』「権謀」）なども伝わる。

　また、趙襄子自身も孔子と直接的、間接的にやりとりをしたとする逸話が見受けられる。しかし、それは必ずしも孔子に好感を持たれているものばかりではなく、その評価を下げるような話も残されている。『列子』「説符」には翟（てき）を攻略した趙襄子が二城をたやすく手に入れたことを憂え、滅亡は我が一族にも及ぶのではないかと危惧する場面がある(6)。この話を伝え聞いた孔子は「趙昌（さか）えんか」と予知し、彼の「持勝」のための謙虚な姿勢を高く評価している。趙襄子の謙虚な人となりを窺い知ることができる一例であろう。これに反して『説苑』「善説」で

は孔子と直接の会話を交わす場面において、趙襄子のあまりにも不躾な言葉を伝えている。こともあろうに、孔子に面と向かって「先生質を委して以て人主に見ゆること七十君。而も通ずる所無し。識らず世に名君無きか。意ふに先生の道固に通ぜざるか」と尋ねているのである。高邁な思想が諸侯に受け入れられない現状について、趙襄子からの単刀直入な質問に対して黙殺する孔子の不快な気持ちは察するにあまりある。こうした逸話に見える趙襄子の姿には時に謙虚に、時に尊大さを見せる人間臭さをあぶり出している。智伯、趙襄子双方の二面性を確認しておくことで、単に明暗で割り切れない君主の本質に近づくことができるのではないだろうか。

(2)趙粛侯と《鶏口牛後》故事

《鶏口牛後》を採録する現行教科書全てが『十八史略』「春秋戦国」を出典としている。この故事は、蘇秦が趙の粛侯に「六国合従」を説く場面において持ち出された寓言であり、『史記』「蘇秦列伝」、『戦国策』「趙策」にはかなり詳細な概要が見える。『十八史略』の簡潔な記述は、読者に状況把握を容易にするという利点があるものの、その反面で細部においては誤解を生じさせる懸念もある。『史記』「蘇秦列伝」については、蘇秦の事跡における年代の齟齬や当時の六国がまだ合従策を受け入れる情勢ではなかったことから、「蘇秦列伝」そのものを「虚構」とした指摘などもある。(7)「史伝」をそのまま史実とする先入観には十分に配慮せねばなるまい。また、教材の出典である『十八史略』は『史記』をさらに簡略化したものであるから、よりいっそうの配慮を要するものだろう。また、司馬遷は『史記』の戦国記事執筆に当たっては『戦国策』の原型である『国策』などを利用しており(8)、両者の類似性は大きいこともあるため、ここでは『史記』「蘇秦列伝」と『十八史略』「春秋戦国」の該当箇所を取りあげて蘇秦の説得方法の経緯について比較考察したい。

即チ因リテ説キテ二趙ノ粛侯ニ一曰ク「天下ノ卿相・人臣・及ルマデ二布衣之士ニ一、皆高二賢トシ君之行義ヲ一、皆願フ三奉ジ レ教ヘヲ陳ブルヲ二忠ヲ於前ニ一之日久シ矣。…窃ニ為ニレ君ノ計ル者ハ、莫シレ若クハ二安ンジ レ民ヲ無キニ レ事。且ツ無カレ二庸テ有ル レ事ニ於民ニ一。安ンズル レ民ヲ之本ハ、在リ二於択ブニ レ交ハリヲ一。択ビテ レ交ハリヲ而得バ、則チ民安ク、択ビテ レ交ハリヲ不レ得、則チ民終身不レ安ンゼ。請フ、言ハン二外患ヲ一、斉・秦為リテ二両敵ト一、而民不レ得レ安キヲ。倚リテ レ秦ニ攻メテ レ斉ヲ、而民不レ得レ安キヲ。倚リテ レ斉ニ攻メテ レ秦ヲ、而民不レ得レ安キヲ。…今大王、与セバ レ秦ニ、則チ秦必ズ弱メン二韓・魏ヲ一。与セバ レ斉ニ、則チ斉必ズ弱メン二楚・魏ヲ一。魏弱ケレバ則チ割カン二河外ヲ一。宜陽効サレバ則チ上郡絶エン。河外割カレバ則チ道不レ通ゼ。楚弱ケレバ則チ無カラン レ援ケ。此ノ三策者、不ル レ可カラ レ不ル二熟計セ一也。夫レ秦下ラバ二軹道ヨリ一、則チ南陽危ク、劫カシ レ韓ヲ包ネバ レ周ヲ、則チ趙氏自ラ操ラン レ兵ヲ。拠リテ レ衛ニ取ラバ レ巻ヲ、則チ斉必ズ入二朝セン秦ニ一。秦欲セバ三已ニ得ント二於山東ヲ一、則チ必ズ挙ゲテ レ兵ヲ而向ハン レ趙ニ矣。秦ノ甲、渡リ レ河ヲ、踰エテ レ漳ヲ拠ラバ二番吾ニ一、則チ兵必ズ戦ハン二於邯鄲之下ニ一矣。此レ臣之所ニ為ニレ君ノ患フル一也。当リテ二今之時ニ一山東之建

国、莫シレ彊キハ二於趙ヨリ一。趙ハ地方二千余里、帯甲数十万、車千乗、騎万匹、粟、支フ二数年ヲ一。西ニ有リ二常山一、南ニ有リ二河漳一、東ニ有リ二清河一、北ニ有リ二燕国一。燕ハ固ヨリ弱国ニシテ、不ルレ足ラレ畏ルルニ也。秦之所ノレ害トスル二於天下ニ一者ハ莫シレ如クハレ趙ニ。然レドモ而秦ノ不ル二敢ヘテ挙ゲテレ兵ヲ伐タレ趙ヲ者ハ、何ゾ也。畏ルレバ三韓・魏之議センコトヲ二其ノ後ヲ一也。然ラバ則チ韓・魏ハ、趙之南蔽也。秦之攻ムル二韓・魏ヲ一也、無シレ有ル二名山大川之限リ一、稍ク蚕二食シ之ヲ一、傅リテ二国都ニ一而止ム。韓・魏、不ハレ能ハレ支フルコトレ秦ヲ、必ズ入リテ臣タラン二於秦ニ一。秦、無ケレバ二韓魏之規一、則チ禍必ズ中ラン二於趙ニ一。此レ臣之所二為ニレ君ノ患フル一也。…臣窃カニ以テ二天下之地図ヲ一案ズルニレ之ヲ、諸侯之地、五二倍シ於秦ニ一、料二度スルニ諸侯之卒ヲ一、十二倍ス於秦ニ一。六国為リレ一ト、幷セテレ力ヲ西郷シテ而攻メバレ秦ヲ、秦必ズ破レン矣。今西面シテ事ヘバレ之ニ、見レン臣トセ二於秦ニ一。夫レ破ルトレ人ヲ之与レ破ラルル二於人ニ一也、臣トスルトレ人ヲ之与レ臣トセラルル二於人ニ一也、豈ニ可ケン二同日ニシテ而論ズ一哉。…六国従親シテ以テ賓ケバレ秦ヲ、則チ秦ノ甲必ズ不ラン下敢ヘテ出デ二於函谷ヲ一以テ害セ中山東ヲ上矣。如クセバレ此ノ、覇王之業成ラント矣。」

趙王曰ク「寡人年少ク、立ツコトレ国ニ日浅ク、未ダ二嘗テ得レ聞クヲ二社稷之長計ヲ一也。今、上客有リレ意下存シテ二天下ヲ一安ンズルニ中諸侯ヲ上。寡人、敬ミテ以テレ国ヲ従ハント」。乃チ飾ヘ二車百乗・黄金千溢・白璧百双・錦繡千純ヲ一、以テ約セシム二諸侯ニ一。

（『史記』「蘇秦列伝」(9)）

説キテ二粛侯ニ一曰ク「諸侯ノ卒、十二倍ス於秦ニ一。幷セテレ力ヲ西ニ向ハバ、秦必ズ破レン矣。為ニ二大王ノ一計ルニ、莫シトレ若クハ二六国従親シテ以テ擯クルニレ秦ヲ。」粛侯乃チ資シレ之ニ、以テ約ス二諸侯ニ一。

（『十八史略』「春秋戦国」）

両者を比較すると、蘇秦が趙の粛侯に合従策を働きかけるに際して、微妙な響きの違いを含んでいることに気づく。特に、『史記』や『戦国策』では、まず強敵として秦以外に斉という大国を持ち出していることに注意したい。結果的にはどちらと組んだ場合にも秦の脅威が強調される流れとなっているが、加えて趙の国力も称揚しながら、その力には秦でさえも一目を置くほどであることも言及している。これに対して、『十八史略』の方では対秦政策に向けて他国との同盟で対抗せんとする「六国合従」しか選択肢が用意されておらず、秦の超然的な存在感のみが強調されているような印象を受ける。また、この話の前提になる秦の脅威について、『十八史略』では「秦人、地の割譲するを求む」と歴然たる事実として差し迫った状況が語られているのに対して、『史記』では蘇秦の発言から連衡策論者の動向に見え隠れする程度にとどまっている。

「夫ノ衡人者、皆欲ス下割キテ二諸侯之地ヲ一以テ予ヘシメント上レ秦ニ。秦ト成ガバ、則チ高クシテ二台榭ヲ一、美ニシテ二宮室ヲ一、聴キ二竽瑟之音ヲ一、前ニハ有リ二楼闕・軒轅一、後ニハ有リ二長姣タル美人一。国被ルモ二秦ノ患ヘヲ一、而モ不ラン与ラ二其ノ憂ヒヲ一。是ノ故ニ夫ノ衡人ハ日夜務メテ以テ二秦ノ権ヲ一恐二喝シ諸侯ヲ一、以テ求ムレ

割カシメンコトヲレ地ヲ。故ニ願ハクハ大王、孰ニ計センコトヲ之ヲ一也。」

衡人（連衡策論者）たちは自分の手柄のために秦王に説きふせて、諸侯に対して地の割譲を求めているから気をつけた方がよいと説得する。いずれにせよ外患であることには変わりないが、間接的な情報であることからも、そこに張り詰められた緊張感は『十八史略』ほどは切実なものではない。『十八史略』は『史記』に多用された会話箇所をしばしば省略し、人物間の口答でのやりとりもしばしば公然たる事実のように地の文に挿入されている。

以上の点を踏まえてみても、趙が周辺諸国などと比較しても秦にすぐに併呑されるような弱国ではないことを確認しておく必要がある。蘇秦のような遊説家は対話相手に向けてはとかく脚色して語ることが常であろうから、粛侯に説いた趙の美点についてはそのまま鵜呑みにすることはできまいが、ただ、趙遊説前に燕の文侯に対しても趙が秦との戦いにしばしば勝利したことに触れており、趙国の優位性はそれなりに説得力を持って見られていたはずだ。

「夫レ燕之所ニ以ノ不ルヲ三犯サレレ寇ヲ被ラ二甲兵ヲ一者ハ、以テ二趙之為ルヲレ蔽ニ其ノ南ニ一也。秦・趙五タビ戦ヒ、秦再ビ勝チテ而趙三タビ勝ツ。秦趙相斃レ、而モ王ハ以テ二全燕ヲ一制ス二其ノ後ヲ一。此レ燕之所ニ以不ルヲレ犯サレレ寇ニ也ト。」（「蘇秦列伝」）

このように、秦と趙とが互角に渡り合ってきた陰で燕が無傷で何とか保っていたことを語っており、強国たる趙のイメージに改めて気づかされる。文侯もこれに「吾が国は小にして西は強趙に迫り、南は斉に近し。斉・趙は彊国なり。子、必ず燕を安んぜんと欲せば、寡人請ふ。国を以て従はん」と国情を吐露しており、小国の実感を滲ませている。

さらに、蘇秦が合従策を決意させるために諸侯に向けられた鄙諺「寧ろ鶏口と為るとも牛後と為る無かれ」を切り出す場面についても両者における違いを感じ取る必要があろう。

（蘇秦）「臣聞ク、鄙諺ニ曰ク『寧ロ為ルトモ二鶏口ト一、無カレトレ為ルヲ二牛後ト一。』今西面シテ交ヘテレ臂ヲ而臣事フルハレ秦ニ、何ゾ異ナラン二於牛後ニ一乎。夫レ以テ二大王之賢ヲ一、挟テ二彊韓之兵ヲ一、而モ有ルハ二牛後之名一、臣窃カニ為ニ二大王ノ一羞ヅトレ之ヲ。」（「蘇秦列伝」）

蘇秦以テ二鄙諺ヲ一説キテ二諸侯ニ一曰ク、「寧ロ為ルトモ二鶏口ト一、無カレトレ為ルヲ二牛後ト一。」於イテレ是ニ六国従合ス。（『十八史略』「春秋戦国」）

『十八史略』の方では六国（特に最初に「合従策」を提示した趙に向けられたもの）と読み取られてしまう可能性があろう。粛侯は年が若いからと蘇秦の指示にそのまま従う形になっている。出典の「蘇秦列伝」では、明らかに三国目の遊説先であった韓の宣王を激した言葉であったことがわかる（『戦国策』「韓策」にも同様の記述が見受けられる）。蘇秦は言葉の効果を感じつつ、この鄙諺を持ち出す相手も選んだはずであろう。果たして、宣王は顔色を変えて天を仰いで大息して「寡人不肖な

りと雖も必ず秦に事ふること能はず」と激昂している。こうして一度は達成された合従策であったが、結果的には秦の画策により同盟が取り崩されて、蘇秦も燕に亡命する。

その虚構性が指摘される「蘇秦列伝」は史実として鵜呑みにすることはできないにしても、これが戦国時代の実態を伝える貴重な漢文教材であることには変わりが無い。ただ、簡便な『十八史略』の記述は時として生徒をミスリードする危険性も孕んでいる。そもそも洛陽出身の蘇秦が最初に仕官先に選んだのが東周であり、次に秦、それから趙の順番であった。秦では商鞅誅殺直後であったことから弁士といった者を信用しなかったし、趙では粛侯の弟奉陽君によって入国を拒まれたことも明記されている。それは蘇秦自身が強大国に魅せられていたことを意味する。燕遊説後はその国情を察して「六国合従」を新たに進言し、各地に遊説する流れとなる。以上の点からも秦を取り巻く六国が等しく弱国であるといった先入観は見直していかねばなるまい。

(3) 恵文王と《完璧帰趙》故事

粛侯の孫に当たる恵文王の時代の故事《完璧帰趙》については、多くの教材に採録されている。「完璧」の語源譚として大変有名なものであるが、この単元の指導に際しては特に「璧」を「壁」と書き誤らないよう注意を促すところだろう。こちらは、『史記』「廉頗藺相如列伝」と『十八史略』の双方が典拠に用いられ、文脈も若干異なっている。『十八史略』の方は簡略で読み進めやすいという利点がある一方で、細部にわたってはやはり誤解を生じさせる記述もある。町田静隆はこの単元について「簡潔ながら人間の本質をついた記述に富む『十八史略』は、再評価されるべき教材と言えよう。記述の足りないところは『史記』で補えばよいことである」と述べている[10]が、実際に両者を読み比べると微妙なニュアンスの違いに気づかされる。《澠池之会》については、「趙世家」には「二十年、廉頗将として斉を攻む。王、秦の昭王と西河の外に遇ふ」といった簡単な記述しか見られないことから、趙家の重要事というよりは藺相如の個人的な功績として捉えられていたようである。「廉頗藺相如列伝」と『十八史略』を見比べる必要があろう。

まず、秦の国より和氏の璧が要求される場面、つまり藺相如が登場する場面である。

趙ノ恵文王ノ時、得タリ二楚ノ和氏ノ璧ヲ一。秦ノ昭王聞キレ之ヲ、使メテ三人ヲシテ遺ラ二趙王一ニ書ヲ一、願ハクハ以テ二十五城ヲ一、請フトレ易ヘントレ璧ニ。趙王ハ与二大将軍廉頗・諸大人一謀ル。欲スレバレ予ヘントレ秦ニ、秦ノ城、恐ラクハ不シテレ可カラレ得、徒ニ見レ欺カ。欲スレバレ勿カラントレ予フルヲ、即チ患フ二秦ノ兵之来ラン一。計未ダレ定ラ。求ム二可キ使ムルレ報ゼレ秦ニ者ヲ一。未ダレ得。宦者ノ令繆賢曰ク「臣ノ舎人藺相如、可シトレ使ヒス。」…於イテレ是ニ王、召シ見テ、問ヒテ二藺相如ニ一曰ク「秦王以テ二十五城ヲ一請フレ易ヘント二寡人之璧ニ一。可キヤレ予フヤ不ヤト。」相如曰ク「秦彊クシテ而趙弱シ。不レ可カラレ不ルレ許サ。」王曰ク「取リテ二吾ガ璧ヲ一、不ンバレ予ヘ我ニ城ヲ一、奈何ト。」相如曰ク「秦、以テレ城ヲ求ムルレ璧ヲ、而趙不ンバレ許サ、曲ハ有リレ趙ニ。趙与ヘテレ璧ヲ、而秦不ンバレ予ヘ二

趙ニ城ヲ一、曲ハ在リレ秦ニ。均スルニ二之ノ二策ヲ一、寧ロ許シテ以テ負ハセント二秦ニ曲ヲ一。」王曰ク「誰カ可キレ使ヒス者ゾ。」相如曰ク「王必ズ無クバレ人、臣願ハクハ奉ジテレ璧ヲ往キテ使ヒシ、城入ラバレ趙ニ而璧ヲバ留ムレ秦ニ。城不ンバレ入ラ、臣請フ、完ウシテレ璧ヲ帰ラントレ趙ニ。」趙王於イテレ是ニ、遂ニ遣ム二相如奉ジテレ璧ヲ西ノカタ入ラ一レ秦ニ。

（『史記』「廉頗藺相如列伝」）

恵文嘗テ得タリ二楚ノ和氏ノ璧ヲ一。秦ノ昭王、請フ下以テ二十五城ヲ一易ヘント上之ニ。欲スレバレ不ラントレ与ヘ、畏レ二秦ノ強キヲ一、欲スレバレ与ヘント、恐ルレ見ルヲレ欺カ。藺相如曰ク「願ハクハ奉ジテレ璧ヲ往カント。城不ンバレ入ラ、則チ臣請フ完シテレ璧ヲ而帰ラント。」

（『十八史略』「春秋戦国」）

ここで気づくことは、『史記』ではまず秦に璧を与える場合、与えない場合の順で仮定しているが、これが続く相如の発言では逆の順番で提示されている。『十八史略』はこの藺相如の見解に倣っている。通常であれば肯定した場合、否定した場合の順で仮説を立てることが自然であろう。相手がどちらを選ぶべきか二者択一に迷う場合、より望ましくない場面を想定してから後者を選択すべきことを説こうとする藺相如の姿勢に『十八史略』では焦点を当てているのではないか。

藺相如の登場場面においても両者には大きな相違点が見られる。『史記』ではまず恵文王は廉頗や諸大臣に下問しているが、誰もこの打開策を答えることができずにいた中で、宦官の繆賢に紹介される形で登場し、恵文王の質問に答える展開となっている。こうした一連の流れがあってこそ後日譚である《刎頸之交》において廉頗が相如の素性の卑しさを揶揄する態度を読み取ることも可能になる。これに対し、『十八史略』では相如については登場箇所が省略されているため、恵文王の直接の下問に対して答えているかのようにも見え、その卑賤な出自については直接伝わってこない。さらに、秦の昭王から欺いて璧を取り戻した経緯は明瞭さを欠いているため、『史記』との照合が必要になるはずである。秦が交換の約束を果たす場面についても両者に差異が見られる。『史記』では「秦王大いに喜び、伝ふるに以て美人及び左右に示す。左右皆万歳を呼ぶ」の状況を目の当たりにして、「相如、秦王の趙に城を償ふに意無きを視る」と相如自身による状況判断であることがわかる。『十八史略』の方は地の文に「秦王、城に償ふに意無し」と記載しているため、事実として読者に提示される。先述のように、『十八史略』側を教科書で採用しているため、状況把握には細心の注意を払わねばなるまい。

そもそも藺相如その人物への評価については古来より高いものがあった。有名なところでは前漢の詩人司馬犬子（長卿）がその人物を慕って名を「相如」に改めたことが伝えられている（『史記』「司馬相如列伝」）。藺相如について司馬遷は次のように評している。

太史公曰ク「知レバレ死ヲ必ズ勇ナリ、非ザル二死スル者ノ難キニ一也。処スルレ死ニ者ノ難キナリ。方タリテハ三藺相如ガ引キレ璧ヲ睨ミレ柱ヲ、及タ叱スルニ二秦王ノ左右ヲ一、勢不レ過ギレ誅ニ。然レドモ士、或イハ

怯懦ニシテ而不二敢ヘテ発セ一。相如一タビ奮ヒテ二其ノ気ヲ一、威、信ブ二敵国ニ一。退キテ而譲リレ頗ニ、名ハ重シ二太山ヨリモ一。其ノ処スル二知勇ニ一、可キレ謂フレ兼ヌトレ之ヲ矣（かな）ト。」

（「廉頗藺相如列伝」）

藺相如の一連の行動については確かに誅殺に値していたはずだが、士人達が臆病であり、発言することもままならない者が多かった中で、藺相如は進んで強秦と対峙し、敵国に名を轟かせた。退いては廉頗に譲って「名は太山よりも重し」とする「知勇兼備」の人物と評された。こうした司馬遷による肯定的な評価は広く受容されるところだが、これに異を唱える者の存在にも注目したい。明代の王世貞は《完璧帰趙論》（第一学習社『古典A』）を著して検討を加えている。

藺相如之完ウスルハレ璧ヲ、人人皆称スルモレ之ヲ、余ハ未ダル二敢ヘテ以テ為サレ信ト也。夫レ秦ハ以テ二十五城之空名ヲ一而モ詐リテレ趙ヲ而脅カス二其ノ璧ヲ一。是ノ時言フレ取ルトレ璧ヲ者、情也。非ザルレ欲スルニ二以テ窺ハントレ趙ヲ也。趙得バ二其ノ情ヲ一、則チ弗レ予ヘ、不ンバレ得二其ノ情ヲ一、則チ予ヘン。得テ二其ノ情ヲ一而畏レバレ之ヲ、則チ予ヘ、得テ二其ノ情ヲ一而弗ンバレ畏レ之ヲ、則チ弗レ予ヘ。此ノ両言モテ決セン耳。奈レ之ヲ何ゾ既ニ畏レテ而モ復タ挑マン二其ノ怒ニ一也。

（「完璧帰趙論」）

まず、王世貞は藺相如のことを世間で称賛する風潮について疑問を呈している。このときの秦は十五城の空手形で和氏の璧を手に入れようとしていたが、狙いはあくまでも璧であり、これを理由に趙を本気で侵略しようとしたわけではないと解釈するのだ。趙が秦の本心を見破っていようとも、論点はあくまで璧を渡すか否かにあった。一度は恐れているのに、秦の要求を無視して挑発する意味があるのかという王の指摘には確かに妥当性がある。果たして相如のこの場面で取った行動の真意はどこにあるのだろうか。

且ツ夫レ秦ハ欲シレ璧ヲ、趙ハ弗ンバレ予ヘレ璧ヲ、両（ふた）ツナガラ無キレ所二曲直スル一也。入レテレ璧ヲ而秦弗ンバレ与ヘレ城ヲ、曲ハ在リレ秦ニ。秦城出ダシテ而璧帰ラバ、曲ハ在リレ趙ニ。欲セバレ使メント二曲ヲシテ在ラレ秦ニ、則チ莫シレ如クハレ棄ツルニレ璧ヲ。畏レバレ棄ツルヲレ璧ヲ。則チ莫シレ如クハレ弗ルニレ予ヘ。夫レ秦王既ニ按ジテレ図ヲ以テ予ヘレ城ヲ、又設ケ二九賓ヲ一、斎シテ而受ケントスレ璧ヲ。其ノ勢ヒ不レ得レ不ルヲレ予ヘレ城ヲ。

（「完璧帰趙論」）

趙と秦との駆け引きの中で璧を与えるかどうかで曲直がどちらに帰すのかをここでは話題にしているが、斎戒沐浴した上で地図を渡した状況下では城を渡さずには済まされなかった秦王の立場を推察している。さらに、王世貞はその後の藺相如の行動にも疑念を抱いている。秦王には城を渡す用意があったことが考えられるのに、藺相如は十五城が渡されないと判断するとすぐさま璧を取り返すように動いた。巧みな策略によって璧の奪還に成功するが、これを無許可で趙国に持ち帰ってしまったため、結果的に秦に理がある状況をもたらしてしまった。秦が

その気になれば趙に攻め入って藺相如一族を誅滅し、璧を強奪してもおかしくなかったが、結局のところはこの時の秦は外交上では趙との関係を本気で断つことを望んでいたわけではなかったことから、たまたま藺相如の行動が功を奏したに過ぎないといった冷静な判断をしている。

こうした美談については頭から強者の横暴な振る舞いに対する弱者の意地に焦点が当てられているため、「判官贔屓」の立場を取る読者にとっては、相如が取ったいずれの行為も美化されて見えるものだろう。『資治通鑑』「周紀四」には、《完璧帰趙》（前二八三年）以後、毎年秦からの猛攻撃を受け続けた恵文王は、澠池での会合（前二七九年）の申し出に当初は不参加を表明したという記載がある。この際にも周囲の説得を受け入れて澠池に趣くのであるが、このとき随従した藺相如には一定の目算があったことだろう。その確証があってこそ彼が大胆不敵な行動に出られたのではないか。もし、その点の配慮すらできなければ、一族の誅滅は免れるはずもない。藺相如ほどの人物がその辺りの計算もないまま無謀な行動をとるとは考えにくい。《刎頸之交》で「秦の敢へて兵を致さざる所以は吾が両虎あればなり」と相如が豪語しているのもこうした計算によるはずである。現に、《澠池之会》九年後の前二七〇年には趙将の趙奢が閼於（あつよ）において秦軍をさんざんに蹴散らして「馬服君」の称号を与えられた記事が「趙世家」には見えており、その対抗姿勢はまだまだ意気盛んなものがあったようだ。

また、主君の恵文王についても剣士を集めることを趣味としていたため、荘子にたしなめられたという逸話も残されている[11]。趙国は主従ともに意気盛んであり、武張った風潮があったことも窺い知れるだろう。藺相如の逸話はその活躍が効を奏したことばかりに焦点が当てられているため、当時の外交状況がぼやけてしまった感がある。一つ一つを検証していくと藺相如の強気な行動が奏功したのは意地を張り通した偶然の賜物であったのか、はたまた計算づくめの結果であったのか、想像をめぐらすことにも意味があるのではないだろうか。

以上、教科書に記載されている問題についていくつか私見を述べてきた。故事成語を見出しに取りながらも初出ではないという点、現行教材が『十八史略』を出典として採録してしまったことにより、『史記』とは異なる読みを引き出してしまう恐れがある点、特定の人物の行動にのみ焦点を当てるのではなく別の視点にも着目すべき点など、今後とも検証していかなければならないところであろう。とにかく偏った知識のみで授業を行なうことは、「史伝」としての全貌を見失ってしまう恐れがあることは押さえておかなくてはならない。

四　趙氏に着目した教材開発の可能性

歴代の趙氏君主の事績は古くから注目を浴びてきた。彼らに焦点を当てることもまた必要なことと思われる。前述した趙簡子、趙襄子父子などは特に数多くの逸話が残されている。現行の教材との関連性を見つめることで、取り扱いの可能性を検討していくことができるものと考えている。ここでは趙氏にまつわる三つの故事を取り上げていくつかの観点から考察していきたい。

(1) 趙盾「弑君」故事

春秋時代の趙氏の始祖趙盾の有名な故事である。父であった趙衰が主君文公につき従って各地を放浪した功績から、趙盾は取り立てられて晋の正卿となった。自ら擁立した主君霊公（文公の孫）に対して諫言することを惜しまなかったが、霊公から疎まれたため、命を狙われた。混乱に乗じて趙盾は亡命を試みるも、別人の手により霊公は暗殺された。事件の経緯は次の通りである。

秋、九月、晋侯飲マシメテ二趙盾ニ酒ヲ一、伏セテレ甲ヲ将ニレ攻メントレ之ヲ。其ノ右、提弥明知ルレ之ヲ。趨リ登リテ曰ク「臣、侍リ二君ノ宴ニ一、過グルハ二三爵ヲ一、非ザルレ礼ニ也ト。」遂ニ跣ニテ以テ下ル。公嗾ス二夫ノ獒ヲ一焉。明搏チテ而殺スレ之ヲ。盾曰ク「棄テレ人ヲ用キルレ犬ヲ。雖モレ猛シト何ヲカ為サント。」闘ヒ且ツ出ヅ。提弥明死スレ之ニ。初メ、宣子田シ二於首山ニ一、舎ル二於翳桑ニ一。見テ二霊輒ノ餓エタルヲ一、問フ二其ノ病ヲ一。曰ク「不ルコトレ食ハ三日ナリ矣ト。」食ハシムレ之ニ。舎ク二其ノ半バヲ一。問フレ之ヲ。曰ク「宦スルコト三年ナリ矣。未ダレ知ラ二母之存否ヲ一。今近シ矣。請フ以テ遺ラントレ之ヲ。」使メテレ尽サレ之ヲ而為ニレ之ガ簞ニシテ二食ト与ヲレ肉、実キテ二諸ヲ橐ニ一以テ与フレ之ニ。既ニシテ而与ルレ為ルニ二公ノ介一。倒ニシテレ戟ヲ以テ禦ギテ二公ノ徒ヲ一而免レシムレ之ヲ。問フ二何ノ故ゾト一。対ヘテ曰ク「翳桑之餓人也ト。」問フ二其ノ名居ヲ一。不シテレ告ゲ而退キ、遂ニ自ラ亡グ也。

乙丑、趙穿、殺ス二霊公ヲ於桃園ニ一。宣子未ダシテレ出デレ山ヲ而復ル。大史書シテ曰ク「趙盾弑スト二其ノ君ヲ一。」以テ示ス二於朝ニ一。宣子曰ク「不トレ然ラ。」対ヘテ曰ク「子為リ二正卿一。亡ゲテ不レ越エレ境ヲ、反リテ不レ討タレ賊ヲ。非ズシテレ子ニ而誰ゾト。」宣子曰ク「嗚呼。『我之レ懐ヒ矣。自ラ詒ストレ伊ノ慼ヒヲ一。』其レ我之レ謂フ矣ト。」孔子曰ク「董狐ハ古之良史也。書シテレ法ヲ不レ隠サ。趙宣子ハ古之良大夫也。為ニレ法ノ受クレ悪ヲ。惜シイ也、越エバレ境ヲ乃チ免レントト。」

（『春秋左氏伝』宣公二（前六〇七）年）

ここでは、霊公が趙盾（宣子）を宴会に招いて暗殺しようと画策していたのを、趙盾の人格に惹かれた提弥明や霊輒によって窮地を逃れている。結局、親族の趙穿によって霊公は弑逆され、この事実を知った趙盾は亡命の最中、国境を越えずに引き返してしまう。しかし、事実を目の当たりにした史官の董狐は「趙盾弑其君」と記す。そのような事実はないと反論する趙盾であったが、董狐は冷静に趙盾の亡命について「国境も越えずに仇も取らなかった。結果的に君を弑したことに変わりがない」と説明する。趙盾は重ねて弁明することなく自己に着せられた汚名を甘受した。孔子は董狐を「昔の良い歴史家」、趙盾を「昔の立派な大夫」と双方を称賛しながらも「惜しむらくは国境を越えていれば汚名を被らずに済んだのに」と述べたという。

事実のためには権力者にでさえ媚びない歴史家の不屈の精神は同じ春秋時代の崔杼と史官とのやりとりにも見られる。斉の大夫崔杼が君主の荘公を弑殺した事実について、史官が「崔杼弑其君」という筆誅を加えたためにこれを殺すと、その弟も同

じ記載をしたためにまた殺し、そのまた弟も同じように記録した際には、崔杼も根負けしてこれを許した故事である。東京書籍『古典A』にはこの単元を採録し、権力者に追従しない歴史家の気骨を読み取らせるような工夫をしている。司馬遷にまで受け継がれる歴史家の原点はこの趙盾と董狐との一件からも読み取られよう。

「趙盾弑其君」の一件については後世様々な角度から取り沙汰されている。『呂氏春秋』では、霊公から趙盾の暗殺を命ぜられた沮麝が「恭敬を忘れざるは、民の主なり」と評したことを伝え、趙盾の名臣ぶりを讃えている（「過理」）。漢の董仲舒は、『春秋』において趙盾が弑逆者としての筆誅を受けていながら、四年後に再びその名が現れることについての理由を考察している。「今、趙盾君を弑し、四年の後別牘に復た見はるるは、春秋の常辞に非ざるなり」、「盾の復た見はるるは、以て問を起こし、親ら弑せざるを弁ずるのみ、誅に当たらざるに非ざるのみ」（『春秋繁露』「玉杯」）と推測し、趙盾が『春秋左氏伝』に弑逆の記事の四年後にその名が登場しているのは筆誅に当たるとしても限定的なものに過ぎないものと解釈している。つまり、仇を取らなかったことについては職務上一定の責任があることは免れないが、自ら手を下した反逆者とは当然一線を画しておく必要があると考えたものだろう。

『文章軌範』などに収められた欧陽修「春秋論」では「弑逆は大悪なり」と断じ、「盾を以て弑する心無きと為るか。其れ大悪を以て軽しく之を加ふべけんや」と評している。趙盾が主君を弑逆する気持ちが少しも無かったならば、彼に大逆の罪を着せることができるはずもないし、反逆者追討にしても手をこまねいて何もせず、下々に刑の正しさを示さなかったのであるから、やはり罰せられて然るべきであるとして、この人物を無辜の人と同様に扱うことはできないとしている。欧陽修は毀誉褒貶の甚だしい評価を受けてきた趙盾を指して「擬似人」とも称しており、彼の紛らわしい行動にも筋道を立てて判断することが必要であると説く。孔子は旧史が善悪入り乱れているので『春秋』編纂を決意したので、「国境を越えれば汚名を被らずに済んだのに」という賛の真偽についてもここでは「謬伝」として扱われている。

以上のように、霊公弑殺時にとった名宰相趙盾の一連の行動については評価が分かれるところとなり、これまでさまざまに解釈されてきた。また、事後における不本意な筆誅を受けながらもそれを甘受した姿勢にも釈然としない点もあろう。趙盾が巻き込まれた事件の本質を巡って彼の心情を考察したり、事後における史官による筆誅の価値を検証したりすることで、生徒には「史伝」の本質を捉えさせていく上で重要な教材になることが予想される。

(2) 武霊王「胡服騎射」故事

趙の最盛期を築いた武霊王は中国史の中でも特色のある人物であろう。「胡服騎射」の制度を取り入れ、中華的な礼制に固執せずに、匈奴をはじめとする異民族に同化する動きについては東洋史の分野では大いに話題になっている[12]。『史記』「匈奴列伝」には「趙の武霊王も亦た俗を変じ、胡服して騎射を習ひ、

北のかた林胡・楼煩を破り、長城を築き、代より陰山の下に並ひ、高闕に至るまで塞を為り、雲中・雁門・代郡を置く」とある。しかし、漢文教材においては《廉頗と藺相如》の単元においてわずかにリード文の中で「胡服騎射」の用語が取りあげられている程度であり[13]、現状ではこの人物について直接取材している教科書は見られない。父の粛侯が蘇秦の「合従策」に荷担したのに対して、若き頃の武霊王は張儀の「連衡策」にも耳を傾けて秦との同盟を結んだこともあった。その後富国強兵のため、中華的な「寛衣」型生活スタイルから国境を接する匈奴に倣った「胡服騎射」に制度を改め、自国兵力の増強を図り、遂には中山国を滅亡させている。

また、恵文王に譲位した後も「主父」と称して絶大な権力を握ったことも注目されている[14]。しかし、後継者をめぐって公子章と公子何（後の恵文王）のどちらを立てるのか曖昧な態度を取ったため、前二九五年には幽閉を余儀なくされ、空しく餓死して絶命した。中国の歴代王侯の中でも異彩を放った人物であると言えよう。このような特異な人物にはもっと注意を払ってもよいのではないか。

二十七年五月戊申、大イニ朝シ二於東宮ニ一、伝ヘテレ国ヲ、立テ二王子何ヲ一以テ為スレ王ト。王、廟見ノ礼畢リ、出デテ臨ムレ朝ニ。大夫悉ク為ルレ臣ト。肥義為リ二相国ト一、幷セテ傅タリレ王ニ。是ヲ為ス二恵文王ト一。恵文王ハ恵后呉娃ノ子也。武霊王、自ラ号シテ為ス二主父ト一。主父、欲シレ令メント二子ヲシテ主ラレ治ムルヲレ国ヲ、而シテ身ハ胡服シテ、将キ二士大夫ヲ一、西北シテ略シ二胡ノ地ヲ一、而シテ欲ス下従リ二雲中・九原一直チニ南シテ襲ハント上レ秦ヲ。於イテレ是ニ、詐リテ自ラ為リテ二使者ト一入ルレ秦ニ。秦ノ昭王不レ知ラ。已ニシテ而怪ミ三其ノ状甚ダ偉ニシテ、非ザルヲ二人臣之度ニ一、使ム二人ヲシテ逐ハレ之ヲ。而シテ主父馳セテ已ニ脱セリレ関ヲ。審カニ問ヘバレ之ヲ、乃チ主父也。秦人大イニ驚ク。主父所二以入リシレ秦ニ者、欲スレバ下自ラ略シ二地形ヲ一、因リテ観ント中秦王之為リヲ上レ人ト也。

（『史記』「趙世家」）

ここでは主父が秦を襲うために、使者に変装して秦に忍び込んだことが語られている。その容貌の魁偉な点を不審に思った秦王の追っ手を逃れて事なきを得たが、その理由は秦を攻略する目的でその地形と王の人柄を直接見ておこうとしたためだとする。このような好奇心旺盛で大胆不敵な姿は秦人を驚かせるのに充分であったようだが、強秦を恐れている様子は微塵も見られない。周辺諸国が等しく秦への脅威を感じていたという見方は誤解を引き出すもとにもなろう。

また、このような身分の低い者に扮した類話としては、匈奴の使者に応対した際に風体の良い崔琰を身代わりに立て、自身は使者となり傍に立って謁見した曹操（『世説新語』「容止篇」）の話があるし、秦からの逃亡による「脱関」については孟嘗君の《鶏鳴狗盗》を思い起こさせる。真偽はともかくこうした話は藺相如の強秦をものともしない精神にも通じているのではないだろうか。また、武霊王が反論を押さえながら、胡服騎射を重臣に根気強く説得して回る話も頻繁に見られる。

趙燕後レテ胡服ス。王令メテレ譲メレ之ヲ曰ク「事フルレ主ニ之行ヒハ、竭シレ意ヲ尽シテレ力ヲ、微カニ諫メテ而不レ譖シクセ、応対シテ不レ怨ミ、不二逆ヒテレ上ニ以テ自ラ伐ラ一、不二立テテレ私ヲ以テ為サレ名ト。子タルノ道ハ順ニシテ而不レ払ラ。臣タルノ行ヒハ譲リテ而不レ争ハ。子、用フレバ二私道ヲ一者、家必ズ乱レ、臣、用フレバ二私義ヲ一者、国必ズ危フシ。反キテレ親ニ以為スハレ行ヒヲ、慈父モ不レ子トセ、逆ヒテレ主ニ以テ自ラ成スハ、恵主モ不ルレ臣トセ也。寡人胡服ス。子独リ弗シテレ服セ逆フハレ主ニ、罪莫シレ大ナルハレ焉ヨリ。以テレ従フヲレ政ニ為シレ累ト、以テレ逆フヲレ主ニ為スハ二高行ト一、私莫シレ大ナルハレ焉ヨリ。故ニ寡人恐ルト下親ヲ犯シテ二刑戮之罪ヲ一、以テ明ラカニセンコトヲ中有司之法ヲ上。」趙燕、再拝稽首シテ曰ク「前ニ吏、命ジテ二胡服ヲ一、施イテ及ブ二賤臣ニ一。臣以テ二失シレ令ヲ過ギシヲレ期ヲ、更ツテ不シテレ用キ二侵辱ヲ一教ヘラレシハ、王之恵也。臣、敬ミテ循メテ二衣服ヲ一、以テ待タント二令日ヲ一。」

（『戦国策』「趙策」）

縁戚の趙燕が胡服を身に着けることになかなか同意しなかったため、武霊王自身が諭している場面である。武霊王は刑罰に処せなければ法を守ることはできないし、本音を言えば黙って新政策に従ってほしいと本心から苦衷を漏らしている。これに対して趙燕は刑罰を加えられずに、寧ろ教化をもって自分に向き合ってくれたことに感謝し、心服して胡服着用に至る。この胡服政策はかなり反発が見られたのではあるが、それを唱導する武霊王の姿には超然的な態度を誇示したばかりでなく、しなやかな配慮も兼ね合わせた為政者の姿が垣間見られよう。

武霊王の出現に際しては既に先祖の予知夢に現れている。ある日、趙簡子は二匹の翟犬をもらい受ける夢を見るが、これは子孫の中に胡服着用者が現れて北狄の地を治めることを意味したものであった（『史記』「趙世家」）。伝統にとらわれずに新政策を提唱し、趙国の最盛期をもたらした武霊王の教材化に検討の余地はないだろうか。とかく中華思想に傾斜しがちな漢文の世界の中で、周辺民族の生活スタイルを積極的に受け入れた人物の存在は生徒にも新たな視点を与えるものと思われる。

(3)平原君「嚢中錐」故事

平原君は武霊王の子にして恵文王の弟であり、「戦国四君」の一人として名高い。「戦国四君」と言えば、《鶏鳴狗盗》の孟嘗君のみに焦点が当てられている傾向がある。魏の信陵君については一社のみ採録している現状だが、平原君の《嚢中の錐》については現行十社での教科書の採録は見られない(15)。『史記』「平原君虞卿列伝」をもととした平原君にまつわる三つの逸話が『十八史略』では毛遂による合従策の故事一つに絞られており、やりとりも『史記』に忠実であるため、教材として適しているだろう。

趙ノ相平原君公子勝、食客常ニ数千人アリ。客ニ有リ二公孫竜トイフ者一。為ス二堅白同異之弁ヲ一。秦、攻ム二趙ノ邯鄲ヲ一。平原君求ム二救ヲ於楚ニ一。択ビ二門下ノ文武備具スル者二十人ヲ一、与レ之倶ニセントス。得タリ二十九人ヲ一。毛遂自ラ薦ム。平原君曰ク「士ノ処ルハレ世ニ、若シ三錐ノ処ルガ二嚢中ニ一。其ノ末立ロニ見ハル。今先生処ルコト二門下ニ一三年、未ダレ有ラ聞ユルコト。」遂曰ク「使メバ二

遂ヲシテ得レ処ルヲ二嚢中一ニ、乃チ穎脱シテ而出デン。非ズト二特ニ末ノ見ハルル而已一ニ。」平原君乃チ以テ備フレ数ニ。十九人目ニ笑ス之ヲ一。至リテレ楚ニ定ムレ従ヲ。不レ決セ。毛遂按ジテレ剣ヲ歴階シテ升リテ曰ク「従之利害ハ、両言ニシテ而決セン耳。今、日出デテ而言ヒ、日、中シテ不ルハレ決セ何ゾ也ト。」楚王怒リ叱シテ曰ク「胡ゾ不ルレ下ラ。吾、与二而ノ君一言フ。汝、何為ルル者ゾト。」毛遂、按ジテレ剣ヲ而前ミテ曰ク「王ノ所二以ハ叱スル一レ遂ヲ、以テ二楚国之衆ヲ一也。今十歩之内、不ル一レ得レ恃ムヲ二楚国之衆ヲ一也。王之命懸レリ二於遂ノ手ニ一、以テセバ二楚之強ヲ一天下莫シ二能ク当ル一。白起ハ小豎子耳。一戦シテ而挙ゲ二鄢・郢ヲ一、再戦シテ而焼キ二夷陵ヲ一、三戦シテ而辱カシム二王之先人ヲ一。此レ百世之怨、趙之所ナリレ羞ヅル。合従ハ為ニシテレ楚ノ、非ザルレ為ニレ趙ノ也ト。」王曰ク「唯唯。誠ニ如シ二先生之言ノ一。謹ンデ奉ジテ二社稷ヲ一以テ従ハント。」遂曰ク「取リ二鶏狗馬之血ヲ一来レト。」捧ゲ二銅盤ヲ一跪キ進ミテ曰ク「王当シニ歃リテレ血ヲ於而定ムレ従ヲ。次者吾ガ君。次者遂ト。」左手ニ持チレ盤ヲ、右手ニ招キ二十九人ヲ一、歃ラシメ二血ヲ於堂下ニ一曰ク「公等碌碌タリ。所謂因リテレ人ニ成スレ事ヲ者也ト。」平原君定メテレ従ヲ帰リテ曰ク「毛先生一タビ至リレ楚ニ、使ムト三趙ヲシテ重カラ二於九鼎・大呂ヨリモ一。」以テレ遂ヲ為ス二上客ト一。楚将トシテ二春申君ヲ一救フレ趙ヲ。会魏ノ信陵君モ亦来リテ救フレ趙ヲ。大ィニ破ル二秦ノ軍ヲ邯鄲ノ下ニ一。

（『十八史略』「春秋戦国」）

平原君には名家の代表的な思想家公孫竜や毛遂などの食客がいた。四君の中では何かと失態を晒すことも多い平原君ではあるが、食客には恵まれていたようだ。《鶏口牛後》時代における祖父の粛侯が対秦政策として採用した「合従策」が再び取り沙汰される中で、窮地の趙を救うために食客の毛遂の力を借りてこれを成功させている。楚との膠着状態の中に割って入り、同盟にまでこぎ着けた毛遂の活躍はめざましく、《澠池之会》の藺相如を彷彿とさせる。《嚢中の錐》という故事成語もまた対秦政策の中で生まれたものであり、「どんな環境においても本当に優れた人物はその才能を発揮する」といった意味は多感な時期の生徒にとっても深い意味を持って響くことになるだろう。この中高生といった年代の者は、不遇の際には自らの責任を直視せずに、原因を他に求める態度がしばしば見られる。「嚢中の錐」という言葉からは「袋の中に鋭利な刃物を入れる」状況も想像させやすく、生徒には「本当に能力のある者は環境に左右されることはない」といった教訓を与えてくれることであろう。

戦国四君たちは食客を集め、多彩な人材が能力を発揮し合っていた。これはつまり、秦に対する抵抗勢力であったことを意味するものだろう。さらに、公孫竜の「堅白異同説」に着目することで、生徒たちは諸子百家の一つ「名家」の存在を知り、諸子百家の思想家を支えたパトロンとしての関係を理解することもできる。この故事は定番教材である孟嘗君の《鶏鳴狗盗》よりも食客の優れた能力を読み取ることが可能になるのではないだろうか。

以上、三つの作品を俯瞰した。趙氏の遠祖趙盾は職務上の責任から筆誅を甘受し、武霊王は伝統的な生活形態を軍事強国に

すべく根気強く周囲を説得しながら新政策を打ち立て、平原君は食客の活躍によって合従を結ばせることに成功した。筆誅、標語、格言といずれも言葉が強い力を持つことを改めて認識させる故事である。こうした趙氏一族の話題を教材として取りあげることで、固定的な価値観に風穴を開け、授業の活性化に繋がるものになるものと思われる。

五　文学作品に生きる「趙」

唐代の伝奇小説《枕中記》には人生に半ば諦め気味の盧生が呂翁の貸し与えた枕によって、栄適夢を見る場面が出てくるが、この舞台がかつての趙の都「邯鄲」であった。

開元七年、道士ニ有リ二呂翁トイフ者一。得タリ二神仙ノ術ヲ一、行キ二邯鄲ノ道中ヲ一、息ヒ二邸舎ニ一摂リレ帽ヲ弛メレ帯ヲ、隠レテレ嚢ニ而坐ス。俄ニ見ル二旅中ノ少年ヲ一。乃チ盧生也。

「邯鄲の夢」といえば、人生の栄枯盛衰を一瞬にして見せてくれるものとしてその影響下の作品が多く生み出された。中国では明代の「邯鄲記」や清代の『聊斎志異』「続黄粱」に引き継がれて描かれ、日本では『太平記』二十五巻、謡曲『邯鄲』などで脚色されて用いられており、中世から既に人口に膾炙していたことがわかる。その後も江戸時代の恋川春町『金々先生栄花夢』や大正時代の芥川龍之介『黄粱夢』などの翻案作品に脈々と受け継がれていく(16)。

他にも「邯鄲の歩み」という言葉もある。これは「むやみに人まねをしてしまえば、本来のものまで忘れてしまう」ことを意味しており、『荘子』「秋水篇」が出典である。邯鄲まで歩き方を学びに行った寿陵余子が邯鄲での歩き方のみならず、もともとの歩き方まで忘れてしまい、匍匐して帰ったという故事である。このように「邯鄲」は、時として「夢」や「憧憬」と結びつく羨望の都として語り継がれてきた場所であることが考えられるだろう(17)。

趙氏一族が滅亡の危機に瀕した運命もしばしば取りあげられている。趙盾の孫、趙武（趙簡子の祖父）の話である。趙盾没後、その息子趙朔は屠岸賈（とがんか）により罪を着せられて一族もろとも根絶やしにされる中、赤子だった趙武は趙朔の二人の友人程嬰と公孫杵臼の機転により難を逃れる。公孫杵臼は身代わりの子とともに屠岸賈の手により討ち取られてその目を欺き、程嬰は趙朔の遺腹である趙武を守り抜き、趙氏再興を見届けてから自身の命を絶つ。出典は『史記』「趙世家」であるが、このドラマチックな話の展開については後世にも深い感動を与えたようで、後漢の王充も、趙武（文子）の母が袴中に隠したわが子に啼き声をあげさせないことで滅亡を免れるといった緊迫した状況下で、文子が生き延びて趙氏を継いだことは天命であったと述べている（『論衡』「吉験」）。趙武は無事に元服を迎え、その凛々しい容姿は人々によって称賛されたことを『国語』「晋語」が伝えている。また、趙武が賢者を登用して晋国内の盗賊を一掃したことも『列子』「説符」に見え、彼もまた趙氏の発展に貢献した優れた資質を持つ人物であったことが窺える。

趙氏が戦国七雄にまでのし上がっていく上でも、かろうじて血統が保たれたこの事件は押さえておかねばならないことの一つであろう。元末明初にはこの話は『趙氏孤兒記』という戯曲として世に現れている[18]。我が国では『太平記』巻十八の中において脚色引用された。金崎攻めの際に、主君脇屋義治を大将としてもりたてながら討ち死にを遂げた禅僧、義艦房の話に添えて、この故事が時代や人物の改変を受けながら挿入されている。ただし、程嬰と杵臼が孤児を死守する一連の流れは同じであるものの、二人が身命をかけて守り通すのは「智伯」の遺児であり、敵役の「屠岸賈」に当たるのが「趙盾」となっている。ここでは秦の治世下、智伯と趙盾が趙国の政権をめぐって争っている最中、趙盾に攻め込まれた智伯が二人に遺児を托して絶命し、成長した智伯の子が趙盾を攻めて趙国を奪い返すという設定に変えられている。

他にも直接的な影響関係ではないが、趙簡子の発言と後世の文芸との関連を見ることもできる。「雀海に入りて蛤と為り、雉は淮に入りて蜃と為り、黿鼉魚鼈は能く化せざるもの莫きに唯だ人は能はず哀しきのみ」（『国語』「晋語」）。自然界における変化に対して人間のみが変化しない現実を趙簡子が嘆いたこの言葉は、『礼記』「月令」に見えるが、「七十二候」の一つ「雀入大水為蛤」として今に伝わる。我が国ではこれは秋の季語として用いられており、蕉門の俳諧にも見ることができる。

蛤蜊の姿も見えず稲雀　　李由　　（『韻塞』「病床」）

「七十二候」は戦国時代には既に広まっていたらしく、『呂氏春秋』「季秋紀」にも「賓爵（雀）大水に入りて蛤と為る」という記述が見える。この俗説は単に「晩秋」といった季節のみならず、「変化」という観点からも我が国における受容されている。そもそも趙簡子が晋の大夫羊殖について「果たして賢大夫なり。変ずる毎に益上る」とその成長を讃えた話（『説苑』「善説」）からも、「変化」を肯定的に捉えている姿勢にも注目したい。

江戸時代の戯作にはこの言葉は「変化」の用例としてしばしば下敷きにされている。佚斎樗山の談義本『田舎荘子』（享保十二（一七二七）年）には、この俗説を下敷きにして、雀がそのうち蛤になる運命を悲観して蝶に悩みを打ち明ける場面がある。

「今我小鳥なりといへども、翅あり足ありて、心のままにとびありく。然るに我九月は海水に入て蛤になるという風聞あり。彼蛤を見るに、目鼻もなく手足もなし。甲をかぶりて、おりおり舌を出せども、何を喰と云こともしらず、極寒にも水中を転びまわり、沙に埋れるばかり也。我かかる身になりたらば、いかがせん。」　（巻上「雀蝶変化」）

ここでは雀が菜虫から立身した蝶の身を羨み、自分は九月になると蛤と化す宿命を憂えている。あの様な海中でうずくまり、何を楽しみにしているのかわからない生活になることを厭っているのだ。これに対して、蝶は『荘子』「胡蝶の夢」の故事を引き合いに出して、「荘子夢中に蝶の心になりて、我は

もと人なりと云事を知らず」と述べた上で、「変化の理はまたかくのごとし」と説き、雀の不安を払拭しようとつとめている。つまり、前世の記憶は来世にまで引き継がれず、その立場立場で分にあった生き方をすべきであるというのである。この『田舎荘子』は『荘子』の思想を卑近な例を用いて啓蒙的に解説する書物であり、世に広くもてはやされた。その後も平賀源内『根無草後篇』（明和六（一七六九）年）にも「それ造化のかぎりなき、小見を以てはかるべからず。田鼠化して鶉となり、雀水に入つて蛤となり、童奴変じて伴当となり、嫁化して姑となる」（二之巻）とあり、「変化」の代表例としていることがわかる。式亭三馬『浮世風呂』（文化六（一八〇九）年）には「雀、海中に入て蛤になるちふ事ア書物にもあるが」（初編巻之上）といった用例も見える。

以上のように、趙氏一族との直接的、間接的な関わりを持った文芸作品は小説、戯曲、韻文の分野にまで及び、その潜在的な影響力にも注目しておく必要があろう。「史伝」教材にとどまらず、こうした側面を有機的に取り扱うことも効果的な指導に繋がるものと考えている。

六　まとめとして

晋の文公とともに各国を放浪した趙衰、「弑君」の筆誅を甘んじて受けた趙盾、一族滅亡に瀕しながら血脈を保った趙武、名君の名高い趙簡子や趙襄子の治世、「胡服騎射」を導入して軍事大国化を果たした武霊王、廉頗と藺相如の活躍をもたらした恵文王、戦国四君の一人として多くの食客を抱えた平原君など、趙氏一族には話題が事欠かない。このような趙氏の黄金期も秦の脅威により翻弄され、抵抗も空しく滅亡を迎える。この地では秦の公子子楚が人質になっていたため、新時代の立役者である始皇帝も誕生している。また、「性悪説」で有名な荀子も趙の出身であり、その弟子韓非子や李斯も秦の政治思想に大きく関わった。他に平原君の食客でもあった名家の公孫竜や黄老学派に属する慎到などがおり、その思想文化に大きな影響を与えた。趙は地理的に複雑な地形をしていることから多文化の交流地帯でもあり、晋以来の中原的華夏文化に加えて北方の遊牧的異文化が混じり合って独自の文化を生み出したことも指摘されている[19]。

秦末期、《項羽と劉邦（漢楚興亡の故事）》の一つ《背水の陣》の場面は一際目を引く場面であるが、趙氏の末裔「趙王歇」なる人物が韓信の攻撃を受けて総崩れしている。ここでは敗者として顧みられることはないが、趙氏の側に立てば旧時代の生き残りとして必死に抵抗したという印象を与えることだろう。このように趙氏はしばしば歴史の表舞台に登場しては消えていく経緯についても体系的な視点で見つめておかねばなるまい。戦国七雄を十把一絡げに捉えるのではなく、一代文化圏を担った一族の興亡を通して伝えることで漢文教材としての戦国時代が実体を持ったものとして生徒には映ることになるだろう。

以上の点からも、趙国が秦の圧迫により怯え続けた脇役としての存在と捉えることは誤りであり、常に話題性を孕んで各国から注目を浴び続けた一族であったことが窺える。こうした背

景により『荘子』の「邯鄲の歩み」、さらには唐代伝奇小説『枕中記』などの舞台として用いられ、後世からも「邯鄲」という夢や憧憬を連想させる空間として記憶されるべき存在となったことだろう。因みに、中島敦の「名人伝」の舞台も邯鄲である。これまで「故事成語」の側面から断片的に捉えられてきた戦国時代を、今後は「史伝」的な観点からも体系的に把握するような配慮が必要になるのではなかろうか。

註

（1）田部井文雄「漢文教材論序説」二〇六頁。（『漢文教育の諸相―研究と教育の視座から』大修館書店　二〇〇五年十二月）

（2）増井經夫「戦国策の源流」二五頁。（『中国歴史書　中国史学史』刀水書房　一九八四年七月）

（3）本稿に引用した『春秋左氏伝』、『史記』、『戦国策』、『国語』、『十八史略』については明治書院『新釈漢文大系』の訓読を参照しつつ、適宜改めた箇所もある。

（4）菊池隆雄「戦国策「唇亡歯寒」について」（『新しい漢字漢文教育』第五十号　二〇一〇年五月）

（5）「趙世家」立項について司馬遷は趙鞅の周室混乱を治めた功績を嘉したものと述べている（「太史公自序」）。また、『呂氏春秋』「仲秋紀」に趙簡子が家臣の難病の治療のために愛していた白驢の肝臓を与えた話、『説苑』「正諫」に趙簡子が斉を攻めようとした際に公盧という兵士の諷諫を聞いて非を悟った話、『新序』「雑事」に趙簡子が直臣周舎からの諫言を受ける前に死なれたことを嘆いた話などが見えており、いずれも分別のある君主といった姿が窺える。

（6）『国語』「晋書」にも同様の逸話があり、ここでは打ち破った相手を「狄」とする。

（7）藤田勝久は「『史記』蘇秦・張儀列伝と史実」において、『史記』の戦国記事の中で最も年代が疑わしいものの代表として「蘇秦列伝」を挙げている。蘇秦の実在性を疑い、「蘇秦列伝」自体を虚構であると指摘したマスペロ、当時東方諸国が秦を脅威とした情勢ではなかったとする銭穆の説を踏まえながら、蘇秦列伝の記述が年代の混乱を招くことを指摘した。その上で一九七三年に馬王堆から出土した『戦国縦横家書』によって蘇秦の活躍した年代が半世紀ほど後になり、蘇代や蘇厲などとの事跡と混同されている可能性を示唆している。（『史記戦国列伝の研究』汲古書院　二〇一一年三月）

（8）藤田勝久「『戦国策』の性格に関する一試論―戦国故事と説話資料―」（『史記戦国史料の研究』東京大学出版会　一九九七年十一月）

（9）明治書院『新釈漢文大系　史記列伝一』（水沢利忠）の訓読に従いながらも、『新釈漢文大系　戦国策中』「趙策」（林秀一）の当該箇所を参照にしながら適宜改めた箇所もある。両者はほぼ同様の記述になっているが、『戦国策』では趙の国土を「三千余里」とし、また趙粛侯が蘇秦を「武安君」に封じた記述などがある。

（10）町田静隆「『十八史略』―躍動する群像」二六二頁。（前掲（1）所収）

(11)『荘子』「説剣篇」による。

(12)橋本明子は「胡服騎射」のうち「胡服」と「騎射」を分け、軍事上における匈奴との同化政策をするために「胡服」政策を重視したという(「戦国趙の「胡服騎射」」『名古屋大学東洋史研究報告』三〇　二〇〇六年三月)。また、石本利宏は軍事に主眼に置いた結果、礼服の変化がもたらされたという(「戦国趙における「胡服騎射」改革」『東洋史苑』七二　二〇〇九年一月)。

(13)「胡服騎射」の記事については桐原書店や三省堂の教材《完璧帰趙》のリード文に見える。

(14)柿沼陽平は、武霊王が生前に譲位した理由について後期改革政策の一環であったと推測している。つまり、武霊王の支配する北方異民族と恵文王が支配する分割統治を狙っていたという(『日本秦漢史研究』第十三号「戦国趙武霊王の諸改革」二〇一三年三月)。

(15)魏の信陵君は情報収集のために各地に人を置き、趙の動向を把握していた故事、侯生を食客として厚く遇した故事などが採録されている(第一学習社「古典B」)。また、第一学習社は旧課程の教材「古典」において平原君の「嚢中の錐」を採録していることからも、「戦国時代」に多く取材した内容となっている。

(16)屋敷信晴「唐代伝奇と日本文化　「枕中記」の受容をめぐって」(『アジア遊学』一〇五　勉誠出版　二〇〇七年十二月)

(17)近藤春雄は『枕中記』が邯鄲を舞台にしている理由について趙の古都としての性格以外に、少年たちがたまる場所であると推測している(「主要作品について3枕中記」『唐代小説の研究』　笠間書院　一九七八年十二月)。また、盛唐の詩人高適の「邯鄲少年行」には、当時の邯鄲の少年達のふるまいを「人をして却りて平原君を憶はしむ」と表現している。

(18)宋代の講談や元初の雑劇などの影響を受け、元末明初には『趙氏孤兒記』という戯曲も創作され、宣教師によって仏訳されたものがヴォルテールを刺激して『L'Orphelin de la Chine』を創作したとされている(吉川幸次郎『趙氏孤兒記』「解説」　同朋舎　一九七九年十二月)。また、宮城谷昌光は「月下の彦士」(『孟夏の太陽』　文藝春秋　一九九四年九月)、安西篤子は「趙氏春秋」(『洛陽の姉妹』講談社　二〇〇二年三月)でこの話を小説化している。

(19)沈長雲等編『趙国史稿』「趙国的思想文化」四三八頁。(中華書局　二〇〇〇年十一月)